

「喜いやん此處で云たるね、コラ講釋師、貝杓子、おたま杓子、汝はお粥も掬へぬお玉杓子やな、汝の噓を聞きに来たんやないわい、講釋を聞きに来たんぢやぞ噓をさらすので前に居る者は唾と痰でヅル／＼ぢやい、こんなん喰うとけ、ハアプウ、オイ喜いやん云ふたりんか」

「云ふたる、こらオイ、なんぢやい、ほんまに、そうやないかいヨオ、ほんまに……」

「何を云ふてるね」

「私い急ぐと物が云い悪いね、こんなん喰べ、スウーと」

「オイ出といで」

「おけら毛虫げし蚊にぼうふり蟬蛙、蜻蝶々に益に蟻蚋ぶん／＼の背中でピカ／＼」

「オイ喜いやん、そんなけつたいな唄を歌ひないな」

「あいやそれへお越のお二人さん、他のお客さんわ私の苦しむを見て黙つてお歸り下さるのに貴郎方お二人は何ぞ私に故障が有るのですか」

「イヤ胡椒が無いので唐辛の粉を燻べたんや」



上方はなしリレー放談 (5)

本心に立還れ

渡 邊 均

落語復興の氣運を醸し出してきたことは、まことにもつて喜ばしい御時世である。漫才に風靡せられてしまつてゐた形のこゝ數年間は、落語界にとつて、これまたやむを得ない御時世だったのである。ある人は、落語家の勉強が足りないせいだともいひ、ある人は、お客が薄つべらになつて落語の味をかみしめる能力がなくなつたせいだともいひ、いろ／＼にははれてきたものだが、それもこれもやはり御時世だったのである。

落語が漫才よりも高等だとか、漫才は落語の下流だとか、そんなことはいふべきでないとは私は、今までから、しば／＼述べてきた。事實、そんなことはあらう筈がない。もと／＼、落語と漫才とは、その性質がちがふのである。性質のちがふものを比較するのは、マスとハカリとを同一に談ずるがごときものである。落語は落語である。漫才は漫